

# 日本のポンペイ

～ 渋川市の遺跡を探る ～

No.21

『古人骨からよみがえる金井に生きた人々』

金井遺跡群からは、発見当初から大きな話題になった金井東裏遺跡1号人骨(甲よかいを着た古墳人)をはじめとして6体の被災人骨が出土しています。

これらの6体の出土した状況はそれぞれ異なっています。金井東裏遺跡では、1号(40代男性)・2号(乳幼児は3歳離れて同じ溝から出土しますが、3号(30代女性)、4号(小児)はそれぞれ1号から16歳、30歳離れた位置から出土しています。また、金井下新田遺跡でも廃棄されていた竪穴建物から、10代の人と馬が一緒になって出土するという組み合わせが2例出土しています。なぜ人々がそれぞれの場所で最期を迎えていたのかを証明する手立てはありません。ただし、自然災害に抗い必死に可能な行動をとろうとしていたことは確かでしょう。

人骨の形態分析からは、朝鮮半島からの渡来人に由来するような特徴を持った人々と、古墳時代の関東地方に住んでいた在来人の特徴を持った人たちが金井に住んでいたことが分かっています。また、骨にみられる筋肉が付着していた痕跡は、考古学的な情報から復元される金井の人々の馬に乗る習慣と矛盾がない分析結果を示しています。歯に含まれる微量元素の分析からは、金井以外で生まれ育った可能性の高い人が含まれていることが分かっています。

古墳時代の渡来系技術・集団に関しては、これまでも検討されてきましたが、金井の人骨は渡来系馬匹ばつ生産集団の具体像に迫る新たな発見となっています。

(九州大学大学院比較社会文化研究院 准教授 舟橋 京子)



金井東裏遺跡1号人骨の最終検出状況(九州大学撮影)